

名句鑑賞讀本

行方克巳
西村和子

名句鑑賞

江苏工业学院图书馆
藏书章

行方克巳
西村和子

角川書店

めいくかんしょうじくほん
名句鑑賞読本

平成九年十一月十日 初版発行

著者 行方克巳
西村和子

発行者 角川歴彦

発行所 株式会社角川書店

〒102 東京都千代田区富士見2-1-13

(03) 333-8185 (営業)

(03) 381-7185 (編集)

振替 00130191195208

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

© Kasumi Namekata & Kazuko Nishimura 1997, ISBN4-04-883503-3 C0095

本書の無断模写(コピー)は、著作権法上で許されたものを除き禁じます。

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブックサービス宛にお送りください。

送料は小社負担でお取り替えいたします。

名句鑑賞読本／目次

杉 日 山 富 阿 山 高 水 前 原 渡 飯 高 正
田 野 口 安 波 口 野 原 田 秋 田 田 浜 岡
久 草 青 風 野 誓 素 桜 普 石 水 蛇 虚 子
女 城 邨 生 畝 子 十 子 鼎 巴 笏 子 規

148 137 126 115 105 94 83 72 61 50 38 27 17 7

竹下しづの女	159
星野立子	170
中村汀女	181
三橋鷹女	192
橋本多佳子	203
久保田万太郎	214
芥川龍之介	224
中村草田男	234
川端茅舎	245
松本たかし	255
石田波郷	265
作者別俳句一覧	277
あとがき	284

装丁 熊谷博人

名句鑑賞讀本

正岡子規

あた、かな雨が降るなり枯葎

季題は「あた、か」で春。「枯葎」で冬とみることもできるが、句の内容から考えて「あた、か」が季題としてふさわしい。また、子規自身もこの句を春に分類している。「枯葎」は、枯れたくさむら。しつとりと枯葎を濡らして日がな降り続ける雨はあたたく、春めいた趣がある。

子規は明治二十七年頃から、絵画の方法論である写生を俳句に取り込み、それを主張、自然景物をありのまま写生することをこころがけた。掲出句は明治二十三年、まだ写生説をとるには至っていない時の作であるが、一句の調べはなだらかで落ちつきがあり、なつかしい春の雨を実感させる。上五「あ」、中七「あ」、そして下五「か」の音がやわらかく響く。

(克巳)

通常、季重なりは一句の傷とされるが、二つの季語のどちらかに明らかに焦点が定まっている場合は、傷とならない。また、実際季節の移り変わりは、微妙に入り交りつつ移りゆくもので、二つの季節の「ゆきあひ」をとらえて詠まれた文学作品が、日本には古来多く見られる。

春暮れて後、夏になり、夏果てて、秋の来るにはあらず。春はやがて夏の気を催し、夏より既

に秋は通ひ、秋は即ち寒くなり、十月は小春の天気、草も青くなり、梅も蕾みぬ。木の葉の落つるも、先づ落ちて芽ぐむにはあらず、下より萌もぎしつはるに堪へずして落つるなり。

これは『徒然草』百五十五段の一節だが、日本の季節感を言い得た文章である。

目にしたまをあるがまま詠んだ子規は、巧まずしてその伝統的な季節感をとらえたのだ。明治二十三年といえ、子規は数えて二十四歳、東京大学の学生であつた。素直で初々しい心から生じた句といえよう。『子規句集』所収。

(和子)

毎年よ彼岸の入に寒いのは

季節は「彼岸」で春。単に「彼岸」といえば俳句では春をさし、秋の彼岸は「秋彼岸」という。俗に「暑さ寒さも彼岸まで」というが、まったくその通りで、どんなに暑い夏も秋彼岸の頃にはずいぶん涼しくなるし、いつまでも寒い年でさえ、彼岸ともなれば春風を実感するようになる。

この句、「母の詞ことば自ことら句になりて」という前書がある。もうお彼岸なのに、今日は寒いね、と作者の言つた言葉に応えて、「毎年よ、彼岸の入に寒いのは」と、お母さんが言つた。それがそのまま五・七・五になつていて、彼岸という季節もある、このままで俳句ではないか、しかも季節の移りゆきの実際のありようを言い得ている。そう思つて書きとめた句、というわけである。(和子)

彼岸の入になつて寒さがまたふり返した。もちろん真冬とは違ふ、いかにも早春の趣が感じられる寒さなのである。そういう微妙なところが説明なしで感得できよう。

交通標語や禁札なども五・七調を取る場合が多い。なぜ五音と七音なのか、いまだに説得力ある

論はないようだが、子規の句はその五音七音の魅力がごく自然の会話の中にも存在することを示している。明治二十六年作。『子規句集』所収。

(克巳)

薪をわるいもうと一人冬籠

季題は「冬籠」で冬。「草庵」と前書。子規は明治二十五年、下谷区上根岸に居を構え、故郷の松山から母八重、妹律を呼び寄せて一緒に住んだ。父隼太は明治五年、子規六歳の時に死去。

妹が薪を割る音がしている。連載中の「癡祭書屋俳話」を書く筆を休めて、子規はじつとその音に聞き入っている。母と妹と暮らしはじめてから一年、子規の病状がそれほど悪くはない頃である。この一句には、ひたすら自分のために心をくだしている妹に対するいとおさが滲み出ている。

母と妹は病弱の子規によく仕えた。特に子規の晩年には、その労苦は筆舌に尽しがたいものがあった。子規は癩癩持であったようで、病のよくないときは大声を發したともいう。ちなみにこの年、子規は大学を中退し、日本新聞社に入社している。

(克巳)

「律は理屈づめの女なり、同感同情のなき木石の如き女なり」。のちに病臥を余儀なくされた子規は、『仰臥漫録』に、不満をぶちまけている。だが同時に、妹の存在の大きさを誰よりも痛感しているのは子規自身であった。「もし一日にても彼なくば一家の事はその運転をとめると同時に余は殆んど生きて居られざるなり。故に余は自分の病氣が如何ように募るとも厭はずただ彼に病なきことを祈れり」と、愛憎のほどを披瀝している。明治二十六年作。『子規句集』所収。

(和子)

行く我にとどまる汝に秋二つ

季題は「秋」。「漱石に別る」という前書がある。子規は自らの意志で日清戦争に従軍し、引き上げる途中喀血、病を神戸や須磨で養ったあと松山に立ち寄った。そしてその年の四月から松山中学に赴任していた漱石の下宿に滞在した五十日余りの間、地元の俳人との句会にあげられた。漱石が後に熱心に作句するようになったのもこれが契機であろう。

掲句は、漱石の下宿をあとにして上京する際に詠んだもの。松山を去って東京に行く自分に、そしてこの地にあつて教鞭をとる漱石に、二つの別々の秋があることよ、という意。この「秋二つ」は、子規の敬愛してやまなかつた蕪村が、永西法師を追慕して作つた、「秋ふたつうきをますほの薄かな」から想を得たことは確かであろう。

(克巳)

秋という季節の持つ情感が、この句の味わいを深いものになっている。たまたま別れた時が秋だった、というのではない。この「秋」を「春」や「冬」と置きかえてみると、その必然性の強さがわかるだろう。日本人にとって、それほど季節の情感は大きなものののだ。

人が人と別れるということは、お互いに相手を失うことである。その淋しさや欠落感を、「秋」という季題に託しているのである。この句が象徴するように、漱石と子規の人生は、こののち大きく別れていった。明治二十八年作。『子規句集』所収。

(和子)

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

季題は「柿」で秋。「法隆寺の茶店に憩ひて」の前書がある。「柿」といえばこの句を思い出され、「法隆寺」と聞けばこの句が口をついて出るほど人口に膾炙した句。

奈良は柿の名産地、どこを歩いてもよく柿畑を目にする。この柿も、わざわざ家から携えたものではなく、道々求めたものだろう。法隆寺に至って、ひと休みした時に、その柿を口にした。すると鐘がゴーンと鳴った、というだけの句である。ああ、秋だなア、奈良だなア、と、いい気分になったことだろう。

この句の人氣は、そうした平明な、どこかユーモラスな味わいにあるのだろう。子供でもわかる句だ。しかも晴れわたった秋天のような、あつけらかんとした気分がある。

(和子)

「柿くへば」という確定条件があったから鐘が鳴ったというのでは勿論ない。たまたま茶店に座って柿を食っていたら、法隆寺の鐘が鳴った、ということである。むしろ、意味からいえば、碧梧桐のいうように「柿くつてをれば鐘鳴る法隆寺」とでもいうところであろうが、それではつまらぬ名句とは、親しみやすく、誰にでも覚えられ愛唱される句、という観点からすれば、まさに名句の条件をそなえている。子規はその随筆の中で、東大寺の茶店で御所柿を所望して食っていると、東大寺の初夜の鐘が鳴り渡ったという話を書いている。あるいはこういう経験があつての作かもしれない。釣鐘と柿の取り合わせは作者自身氣に入つたようで、何となくおかしみがある。明治二十八年作。『子規句集』所収。

(克己)

小夜時雨上野を虚子の来つゝあらん

季節は「小夜時雨」で冬。「小夜」は夜の美称。冬のはじめの頃、さっと降りだしては止む雨を時雨という。

明治二十九年、子規三十歳の十一月頃、これまで単なるリウマチ性の腰痛と考えていた病状が悪化し、静臥を余儀なくされるまでになってしまった。その夜、虚子の来訪を待っていた子規は、この時雨の音が耳について離れない。もういつものように虚子が来る時分だ。今頃は上野あたりを歩いてゐるだろうか。

多くの俳句の弟子の中でも虚子は特別だった。郷里を同じくする縁もあって、虚子は誰よりも親しく感じる。このように病臥している今、何よりもうれしいのはそういう弟子との会話である。骨身を惜しまず子規のために働く母や妹では、やはりその役はつとまらないのである。（克巳）

子規は虚子が今、自分に向かって歩いて来つつあることを感じている。虚子は誰よりも待たれている。子規の闘病生活に取材した虚子の小説『柿二つ』や、回想記『子規居士と余』などによると、病床の子規は、多くの弟子の中でも虚子が枕頭に侍ることを最も好んだ。よく虚子呼びつけた。同じく同郷の碧梧桐でさえ、「居士は虚子が一番好きであつたのだ」と言っている。

すぐ来いといふ子規の夢明易き 虚子

これは昭和二十九年の作。子規が逝って既に半世紀の歳月が経っているとは思えぬほど、精神の呼应が感じられる句ではないか。『子規句集』所収。（和子）

いくたびも雪の深さを尋ねけり

季題は「雪」で冬。「病中雪」と前書のある三句のうちの一つ。作者は病臥していて、雪がどのくらい積ったのか見に立つこともかなわない。寝たまま家人に雪の深さを尋ねたというのである。しかも、いくたびも。

温暖な松山に生まれ育ち、東京で生活している子規にとって、年に数度の東京の大雪は、心ひかれる景であつたに違いない。ただでさえ変化のない病床六尺の天地である。雪が降ったら外へ出てみたい。その心の動きが「いくたびも」にこめられていよう。

(和子)

この句が作られた明治二十九年、子規の腰痛はその当時の医学では不治の病ともいえるカリエスであることがはつきりする。花見に行ったり外出することも何度かあつたのだが、十一月には病状が進み、病臥の毎日を余儀なくされるようになってしまった。病む子規にとって、障子の外の雪景色は一大事なのである。家人の言葉を仲介にして彼の脳裏に雪は切々と降り積つてゆく。子規の空想世界において雪景色は刻々と変化してゆくのである。『子規句集』所収。

(克巳)

三千の俳句をけみし柿一つ

季題は「柿」で秋。「聞す」とは「検す」とも書き、改め調べるの意。俳句を聞するといふのだから、選をしたり朱筆をいれたり、といったところだろうか。

三千の俳句を聞した後の、柿二つの美味は、それまでの心身の疲れを癒すだけのものがあつたのだ。それはどんな報酬より作者の心身を潤したのだ。柿が子規の大好物であつたことは、つとに有名だが、どれほど好きであつたかをこの句は語っていよう。柿二つを楽しみに、三千もの俳句を聞

したかのように、この二つの柿は輝いている。

(和子)

「ある日夜にかけて俳句函の底を叩きて」という前書のある句。子規の病床には枕元に俳句の投句稿を入れる函が置かれてあった。それを叩くということは選句を完了するということである。

つり鐘の薔のところが渋かりき

子規

という作がある。京都の禅僧愚庵が、庭の柿を柿好きの子規に送った時の返事の一句である。貰った柿に対して少し渋かったというところが禅僧に対する俳諧味のゆたかな挨拶になっている。虚子の小説『柿二つ』に、この愚庵から贈られた柿の話が出てくる。子規はその柿のほとんどをあとという間に平らげてしまい、残ったのは掲出句にある柿二つだけになってしまった。子規は最後の二つを剥いて食ったが、その薔のところが少し渋いことに気づいた。しかしそんなことに全く頓着せず、きれいに食べてしまった、というのである。明治三十年作。『子規句集』所収。

(克巳)

鶏頭の十四五本もありぬべし

季題は〈鶏頭〉で秋。その名のごとく鶏のとさかのような真っ赤な花を咲かせる植物である。庭の景でもあろうか、鶏頭の花が咲いている。それがざっと見て十四、五本もあるだろうか、というそれだけの句である。

いかにも見たまま、あるがままを言っただけの句で、評価は大きくわかれている。斎藤茂吉は、この句の「端的単心の趣」を高く評価したが、高浜虚子は『子規句集』を編む際、この句を採録さえしなかった。しかし、虚子が『子規句集』に選んだ鶏頭の句〈鶏頭や賤が伏家の唐錦〉へ墓原や